キャラクター名
水梨 由愛（みずなし ゆあ）

プレイヤー名

シンドローム	ハヌマーン ウロボロス	ワークス	UGNエージェントC	カヴァー	高校生
オプショナル		年齢	16歳	性別	女
覚醒	渇望	衝動	自傷	初期侵食率	45 %
出自	資産家	経験	初恋	邂逅	慕情

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値
肉体	2	0	0			2
感覚	2	0	0			2
精神	3	1	1			5
社会	1	0	0			1

HP	29
行動値	9
(非装備時)	9
戦闘移動	14
全力移動	28

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵			射撃	4		ＲＣ	1		交渉		
回避			知覚			意志	2	1	調達	6	
運転：			芸術：			知識：赤頭塵	4		情報：UGN	1	
運転：			芸術：			知識：			情報：赤頭塵	3	
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
必中の弓	射撃	2r+14	-	11		射撃攻撃の達成値+10、あらゆるダイスペナルティを受けない。攻撃を外すと放心を受ける
君想う弓（アフェクション・アロー）	射撃	5r+14	-	11		

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

合計装甲：	0	合計回避：	0

所持品	
コネ：要人への貸し	
コネ:手配師	
思い出の一品	
ウェポンケース	

ロイス				
対象	感情(pos)	感情(neg)	タイタス	消費
Dロイス：遺産継承者	P	N		
大好き♪：赤頭 塵	P 慈愛	N 偏愛		
可愛い妹：水梨 愛梨	P 庇護	N 支配欲		
シナリオロイス："スノウ・リリィ"	P 好奇心	N 敵愾心		
支部長さん：鮎川 真依弥	P 誠意	N 憐憫		
敵：クロード=ミシェｒ（略）	P 塵君の知り合い	N 無関心		
一応味方？：伊藤愛	P 清華ちゃんの友達	N 無関心		

最大財産P: 14	残り財産P： 9

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果：非オーヴァードのエキストラ化								
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果：コスト分のHPで復活								
コンセントレイト：ウロボロス	3	2	メジャー	-	-	シンドローム	-	
効果：C値-LV（下限値7）								
無形の影	1	4	メジャー	-	-	効果参照	-	
効果：あらゆる判定を【精神】で行う。ラウンド1回								
援護の風	5	2	オート	視界	単体	自動	-	
効果：判定ダイス+5個、ラウンド1回								
ウィンドブレス	3	2	オート	視界	単体	自動	リミット	
効果：↑と同時に使用、達成値+[LV×3]								
原初の紫：妖精の手	3	5	オート	視界	単体	自動	-	
効果：判定ダイスを1つ10に変更する。シナリオLV回								
原初の黒：勝利の女神	5	6	オート	視界	単体	自動	100%	
効果：判定直後に使用、達成値+[LV×3]。ラウンド1回								
原初の灰：痛みの極光	1	6	オート	視界	単体	自動	120%	
効果：自身以外のDR直前に使用、ダメージ+[LV×2]子、使用後HPが0。シナリオ1回								
イージーフェイカー：地獄耳	1	1	メジャー	至近	自身	自動	-	
効果：領域内の出来事を目利きする								
禁じられし業	1	3	オート	視界	単体	自動	-	
効果：イージーエフェクトを打ち消す。シナリオLV回								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								

世間一般から見れば裕福な家庭に生まれ、幼少期は何一つ不自由なく育つ。そんな中、幼心に抱いた初恋。その相手が赤頭塵だった。幼い由愛は恋愛の仕方など理解できていなかったが、それでも精一杯自分の好意を伝えよう、相手に自分の事を好きになって貰おうと彼女なりの誠心誠意を込めて初恋の相手に尽くした。彼の為になることは何でも手伝おうとしたし、テレビの見よう見まねで最大限の愛情を伝えようとした。拙い由愛の表現に対し、相手はあくまで子供の好意に応える形として由愛の行動を褒めてくれていたが、当時幼子に向ける愛情と恋愛感情の差を理解できなかった由愛にとってはそれが何よりも嬉しく、その感情が元となり好きな相手、特に意中の相手である赤頭塵に対してとにかく尽くそうとする性格が形成された。万事に置いて好きな相手を優先する性格は当時から若干の危うさを秘めていたが、この頃はまだ幼いながらも母性的な面の方が強く表に出ていた。

転機となったのは一年半前、ある日彼女の想い人である赤頭塵が一人で出かけたことを不審に思いひっそりとついていくと、たどり着いた場所で彼がジャーム化した実の父親と交戦し、殺害するところを目撃してしまう。人外の力による戦闘を、声を出すことも出来ずに震えながら見ていた由愛の心に最初に浮かんだ感情は、恐怖だった。2人が見せた力にでも、目の前で命が失われたことに対してでもない。赤頭塵が、自分が恋い焦がれ続けている最愛の相手が自分の手の届かない所へ行ってしまう。自分は彼に何もしてあげる事が出来なくなってしまう。彼から必要とされなくなってしまうという恐怖。愛する人が自分の理解の外の世界へと行ってしまうという、喪失感と絶望感からくる感情だった。

一瞬の間に赤頭塵が自分から離れていく未来、赤頭塵がいない未来を幻視した由愛は、そのショックで半狂乱に陥りながらもとっさに、あるいは本能的にその場に落ちていた塵の血痕が付いた衣服の切れ端を拾い上げ、そのまま帰宅し自室へと戻る。最愛の人を喪失する恐怖に震えながらも何とかそれだけは避けなければと未だ乱れた思考をフル稼働させ先程見た光景と聞き取れた会話を思い出していくと、その中に「レネゲイドウィルス」という単語があったことを思い出した。「レネゲイド」などというものに聞き覚えはないが「ウィルス」という単語は当然由愛の中に存在していた。ウィルス、つまり誰かに感染するもの……そう考えた時、由愛の中で狂気とも呼べる考えが浮かんだ。「私もレネゲイドウィルスに感染すれば、塵君と同じ所へ行ける」と。

不安が脳内をよぎったのは一瞬だった。万が一ウィルスによって死ぬかもしれないとしても、感染を避けた結果赤頭塵が自分の傍からいなくなればそれは自分にとって死と同じだった。何より、ウィルスならば大抵のものは恐らく血液感染が起こるはず。そして、自分の手元にはレネゲイドウィルスに感染した、それも最愛の人の血液がある。偶然にしては出来過ぎている。きっと私は本能、もしくは頭のどこかで既にこの選択肢にたどり着き、無意識のうちに最善の行動を取っ